

第7回

大学生の 帰属意識

Contents

Part.1 解説

江戸川大学 社会学部長・人間心理学科長
中村真教授 p60

Part.2 大学の取り組み

早稲田大学 p64
中京大学 p66

大学を みる 視点

長引くコロナ禍の中で、入学式等の行事の中止、対面授業の減少とオンライン授業の増加、課外活動の制限などにより、思い描いていたキャンパスライフが送れず、悩みを抱える大学生は少なくないでしょう。このような状況下では、これから進路選択をする高校生にとって、大学に所属している実感を得ること、そして、その実感を学生に持たせるために、大学がどのような取り組みをしているかということは重要なポイントになるかと思います。

そこで今回は、「帰属意識」に注目します。Part.1で、江戸川大学中村真先生に、大学への帰属意識

(愛着) が学生に与える影響について解説していただいた上で、Part.2では早稲田大学と中京大学の帰属意識を醸成する取り組みについて紹介します。

帰属意識が低調と考えられる現在、大学は文化推進事業や自校教育といった既存の取り組みに加えて、学生の厳しい現状を把握し考慮した上で、できるだけキャンパスに足を運ぶ機会を設けたり、オンライン上での交流機会の創出に取り組んだりするなど、さまざまな対策を講じています。大学が学生を大切にしているかは、こういった取り組みに見えてきます。進路選択の際参考にしていただきたいと思います。

Part.1 解説

江戸川大学 社会学部長・人間心理学科長 中村真教授

大学への帰属意識(愛着)が 大学不適應を抑制する コロナ禍の現在は特別な対応が必要に



中村真 教授

コロナ禍で普及したオンライン授業は、学修機会の提供に関しては必要な条件をある程度満たしているが、人的交流の機会を持ちにくいという課題がある。大学、学生の努力も続けられてはいるものの、現状は大学生にとって望ましい状態にあるとは言い難い。コロナ禍は、大

学や学生にどのような影響を及ぼしているのだろうか。また、大学にはどのような対応策が求められるのか。大学への帰属意識(愛着)が大学生活への適応にどのような影響を与えるかを調査研究によって明らかにした、江戸川大学中村真教授にお話をうかがった。

中途退学者を減らすことは 大学にとって大きな課題 その背景には不適応問題がある

大学生の中途退学については、以前より問題視されてきた。最近では情報公開も進み、各大学の中途退学者数や退学率も可視化されつつある。中途退学者を減らすことは、大学に課せられた大きな課題の一つだ。特に学生の授業料収入に大きく依存する私立大学にとっては経営課題でもある。

中途退学の主な理由には、経済的要因とともに、大学への不適応が挙げられる。そこで、大学生活への適応という心理的要因に着目して研究を行ったのが江戸川大学中村真教授らの研究グループだ。大学、部活動、アルバイトなど大学生が所属している組織への帰属意識が大学生活の充実感に影響するという他の研究結果（高木、2007）を踏まえ、中村教授は大学への帰属意識が大学への適応を促して、大学不適応に対しては抑制的に影響力を持つ可能性があるのではないかと考えた。

なお、ここでいう帰属意識とは、ある集団や組織に所属することに基づく情緒的な愛着のことである（中島 他、1999）。つまり、自分がある集団に属している、あるいはその集団の一員であるという意識や感覚を意味する概念で、一般に、帰属意識が高い人は所属する集団に対して一体感を持ち、愛着や興味・関心などが強いとされている。中村教授は、大学への帰属意識を測定するための質問項目を用いて、帰属意識を構成する4つの因子を特定し、その中で大学適応に最も影響のある愛着因子を帰属意識の指標として、2012年から2017年にかけて研究に取り組んだ。

友人関係の希薄さ、入学目的の曖昧さが 帰属意識を媒介して不適応に影響する

中村教授らが大学への帰属意識と大学生活への満足度、大学への不適応について、質問紙調査を行った結果、友人関係の希薄さ、入学目的の曖昧さといった要因が、大学への帰属意識（愛着）を媒介して大学生活の満足度を低め、授業理解の困難さとともに大学不適応の傾向を高めていることが実証的に示された。

中村教授は「大学不適応に直接的かつ最も強く影響するのは、授業理解の困難さです」とした上で、帰属意識がどのように大学不適応に影響するかについて次のように解説する。

まず、「友人関係の良好さは、大学不適応に対して直接的には影響を及ぼさないか、影響するとしてもその程度は大きくありません。しかし、大学への帰属意識（愛着）には強く影響します。友人がいることによって、自分が大学に馴染んでいる、あるいは居場所がある、という意識に結び付きやすいためです。そして、大学への帰属意識（愛着）は、大学不適応の低さに強く影響します」と、友人関係の希薄さは主として間接的に大学不適応に影響していると話す。

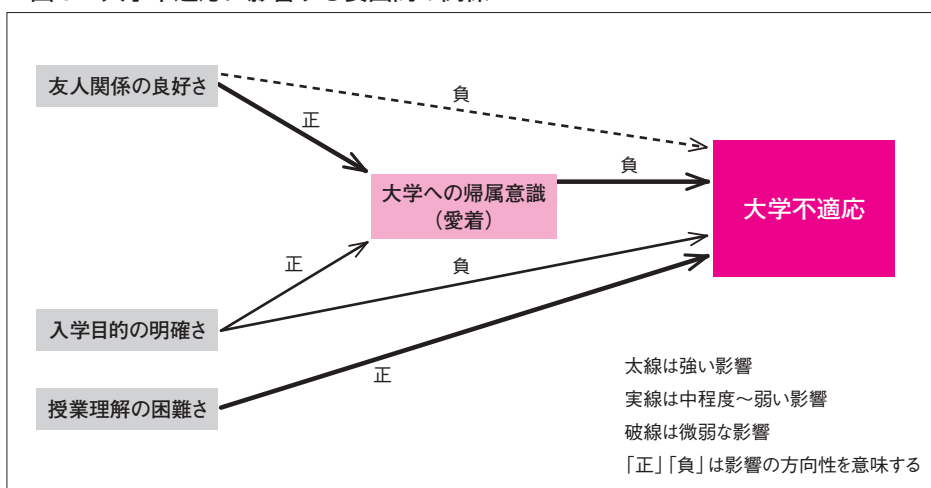
また、「入学目的が明確であることも、大学不適応の低さに影響すると同時に、大学への帰属意識（愛着）にも影響を与えています。明確な目的を持って入学することが、大学への馴染みやすさ、居心地のよさ、大学に受け入れられていると思うことにも結び付いています」と入学目的が明確であることの重要性についても指摘する。

帰属意識の大学不適応への影響については、「大学への帰属意識（愛着）は、大学不適応の抑制に強い影響力を持ちます。そして、友人関係の良好さ、入学目的の明確

さと大学不適応の間にある、大学不適応の低さに影響する媒介要因として非常に効果的であることがわかりました」と話す<図1>。

ところで、上記の質問紙調査における大学不適応の測定は、回答者の主観的な適応感に基づくものであるため、これらの結果を客観的に裏付けることを目的に、中村教授は、授業への出席率（出

<図1> 大学不適応に影響する要因間の関係



（中村・松田（2013,2014）の結果に基づいて作成）

席回数÷授業回数)とGPA^(注1)を用いて一連の研究知見を定量的に検証している。この結果、大学不適応感、出席率の低さを介してGPAの低さに影響することが示された。

以上の結果をまとめると、授業理解の困難さは直接的に大学不適応を促し、入学目的の明確さおよび友人関係の良好さは大学への帰属意識(愛着)を媒介して、間接的に大学不適応を抑制する効果を持つが、大学不適応感が高まると出席率が下がり、その結果として怠学や成績不振、ひいては留年や中途退学につながるという関係が見られるのだ。中村教授も「常識的な結果といえるかもしれませんが、客観的、定量的に示すことにより、大学不適応感が留年や中途退学を予測する有効な指標となり得ることが示せたと思います」と語る。

大学不適応、中途退学を予防するためにはこれらに影響する要因に着目した施策が必要

これまでの研究結果を踏まえ、中村教授は、大学不適応ひいては中途退学を予防するためには次の方策が有効だと話す。

- ①授業理解を促すような学生への働きかけ
- ②友人関係を築きにくい学生に対する的確な環境支援
- ③入学目的の明確化を推進するための広報活動や入試方法の改善、入学後も目的や目標を維持できるような学業面および進路面での支援体制

①授業理解を促す働きかけは、成績不振の防止等の観点から最も重要な方策である。また、高校側も、生徒を基礎学力が乏しいまま大学に進学させることがないよう意識しておきたいところだ。

②については、大学で具体的な取り組みが行われている。たとえば、人付き合いの技術に自信の無い学生のためのソーシャル・スキル・トレーニングなどのセミナーを導入する一方、学食に一人席のあるエリアを一定数設け、一人だけでも学食を利用しやすい環境を用意するといった対応も進んでいる。

③入学目的の明確化を推進するためには、高校生だけでなく、高校の先生方や保護者に対しても入学後の大学適応を視野に入れた広報活動を行う必要があるだろう。

中村教授は、「大学不適応の3つの要因(授業理解の困難さ、入学目的の曖昧さ、友人関係の希薄さ)のうち2つ以上に該当する学生はかなり厳しい状態と考えられますので、大学側も迅速できめ細かな支援が必要であるといえます。その上で、大局的には、毎年の退学者数に一

喜一憂するだけでなく、大学不適応に影響する諸要因に着目した施策や解決策を考えることが肝要です」と話す。

コロナ禍で大学への帰属意識(愛着)を醸成する機会が失われている

また、中村教授は、大学への帰属意識(愛着)を高めたり、醸成したりするために大学がとれる方策として以下を挙げている。たとえば、新入生歓迎会や学園祭などの大学行事、部活動やサークルなど学生同士が交流できるさまざまな機会の提供とその充実化である。しかし、「コロナ禍でこうした機会はことごとく制限されています。友人関係の構築の機会が丸ごと失われています。本当に厳しい状況だと思います」とコロナ禍の学生を思いやる。

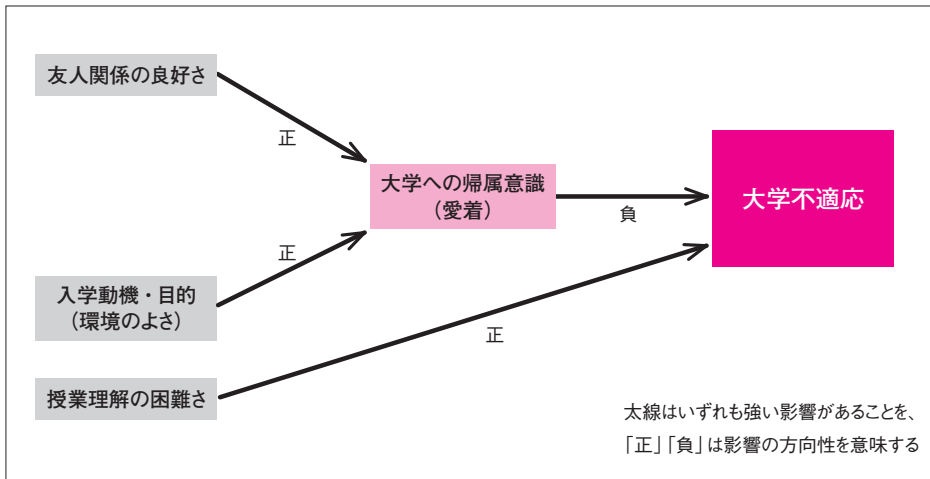
中村教授は以前、大学への入学動機(入学目的)に関する調査研究に取り組んだ経験があり、大学生の入学動機が10種類に分類されるという知見を得ている。その中には、大学への帰属意識(愛着)を高めることにつながる研究成果も含まれるという。「調査の結果、大学生の入学動機(入学目的)は、自由を謳歌したいという『自由・享楽』だったり、『知名度・評判』で選んだり、純粋に医学や文学などの『学問的探究』を行いたいと考えたりするなどさまざまです。また、自分が入学できそうな大学を選ぶ『偏差値との適合』や、将来を考えた『将来展望』、何となく選ぶ『消極的選択』もあります。そして、キャンパスの雰囲気よかった、あるいは設備が整っているなどの『環境のよさ』のほか、『出会い・集い志向』、『周囲のすすめ』、『世間体・同調』です」と10種類の入学動機を説明する。

そして、この中でも『環境のよさ』を理由に大学に入学した学生は、就学意欲や大学への満足度が高い傾向が見られたという。『環境のよさ』とは、キャンパスの環境、校舎の美しさ、大学の雰囲気である。中村教授は「『環境のよさ』を理由に入学した学生は、「居心地のよさ、自分の居場所、自分が受け入れられている」という思いから、大学への帰属意識が高まりやすく、それが不適応を抑止する要因として機能しているといえます」と解説する<図2>。

ただし、ここにもコロナ禍の影響がある。「『環境のよさ』が入学動機だった学生でも、特に現在の2年生は入学時から、実際にキャンパスに行く機会が制限されています。また、環境面を知るという点ではオープンキャンパスも重要な機会ですが、今はそれにも一定の制約があります。そのため、高校生が実際にキャンパスに足を運んで雰囲気や環境を確かめることが十分にできないまま

(注1) GPA: Grade Point Average。客観的な成績評価を行うため、授業科目ごとに0～4などのポイントを付した上で、単位数などを加味して学生ごとの成績の平均を算出する成績評価方法。

＜図2＞大学不適応に影響する要因間の関係（「環境のよさ」）



（中村・薊（2017）の結果に基づいて作成）

大学に入学することにもつながります。この先、しばらくの間は、このような状況がどうしても避けられない、あるいは影響が残るでしょう」と心配している。

大学にはコロナの影響により 空白期間を余儀なくされた在学生への 配慮が求められる 高校生は既存の友人関係も大切に

コロナ禍にあって、現在の大学生の大学への帰属意識は低調な状況にあると考えられる。全国大学生活協同組合連合会が全国の大学生約7,600人を対象に、2021年7月に行ったアンケート調査の結果が発表されている^{（注2）}が、それによると44.7%の学生が「学生生活は充実していない」と回答している（2019年秋の調査では同じ質問への回答は11.2%、2020年秋は25.8%）。コロナ禍が長引いている影響か、数字は年々悪くなっている。

また、「大学でできた友人は5人未満」と回答した学生は、3～4年生の約19%に対して、1年生は31.2%、2年生は35.1%となっている。もちろん、0人という回答もある。中村教授は「3割強の1～2年生は大学でできた友人が5人未満です。SNSなどを利用するなど各大学や学生自身も友人関係を築く努力をしていますが、限界があります。それがこの数字に表れているのではないのでしょうか。この調査は大学への帰属意識そのものを尋ねてはいませんが、帰属意識が低調にあることは十分に推測できます。友達がなかなか作れないですし、確たる入学目的を持って入学したとしても、それを確認したり、満喫したりすることができません」と現状への厳しい認識を示した。

今後について中村教授は、予測しづらいとしながらも「ワクチン接種が進み、対面授業の割合が増えていく中で、大学への帰属意識についても数年かけて徐々に元の状態に戻っていくのではないかと思います」と予想する。ただ、現在の1～2年生は従来の大学生が経験してきたキャンパスライフを満喫できていないことから、「最も多感な年代の学生たちが、貴重な機会

を奪われています。仮に大学が以前の状態に戻ったとしても、現在の1～2年生が進級した後、従来の3～4年生と全く同じ対応でいいのかを含めて善後策を検討する必要があります。コロナ禍による空白期間の全ては埋められませんが、大学には何らかの措置が求められます」と話す。

中村教授は、これから大学進学をめざす高校生に対して、帰属意識と大学不適応の研究結果から、授業理解に必要な基礎学力の大切さを説くとともに、計画的にレポート課題に取り組むなど、自律的な学修が求められると話す。また、「友人関係の良好さ」については、コロナ禍が続く大学入学後の友人作りが厳しい状況にも触れながら、高校までにできた友人や家族など既存の人間関係を大切にすることの大事さを強調した。

引用・参考文献

- 中島義明 他（編） 1999 心理学辞典 有斐閣
- 中村 真・松田英子 2013 大学生の学校適応に影響する要因の検討—大学不適応、大学満足、就学意欲に着目して— 江戸川大学紀要 第23号 151-160.
- 中村 真・松田英子 2014 大学への帰属意識が大学不適応に及ぼす影響—帰属意識の媒介効果における性差および適応感を高める友人関係機能—江戸川大学紀要 第24号 13-19.
- 中村 真・松田英子 2015 大学への帰属意識が大学不適応に及ぼす影響(2) —出席率,GPAを用いた分析—江戸川大学紀要 第25号 135-144.
- 中村 真・薊理津子 2017 大学適応に影響する要因としての入学動機に関する基礎的検討 江戸川大学紀要 第27号 301-308.
- 高木浩人 2007 大学生の組織帰属意識と充実感の関係 愛知学院大学論叢心身科学部紀要, 2, 増刊号, 61-67.

（注2）出典：全国大学生活協同組合連合会調べ <https://www.univcoop.or.jp/covid19/index.html>

※全国大学生協連サイト：<https://www.univcoop.or.jp/>（検索：全国大学生協連）